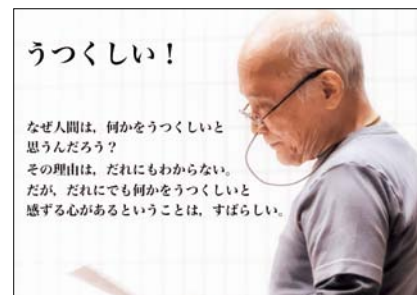


学習指導書のご案内

平成28年度版教科書に合わせて、『中学校美術 学習指導書』が、充実の内容となりました。目ざしたのは「本当に使える指導書」。先生方のご要望を反映し、紙面の見やすさはもちろんのこと、ワークシートの構成や技法動画のクオリティなど、細部にまでこだわって編集しました。他にも、カラー大判掛図や、3作品の屏風模型が付属するなど、充実のラインアップです。

DVD-Video



●鑑賞映像

『美術1』の表紙を飾る作家、三沢厚彦さんの制作記録と、谷川俊太郎さんの朗読による「うつくしい！」特別映像を収録。



●技法動画集

教科書の「学習を支える資料」に掲載している技法を動画で収録。平面と立体で合計40本を新たに撮りおろしました。



何をあらわしているだろう？

『中学校美術 学習指導書1』
本体価格28,000円+税『中学校美術 学習指導書2・3』
本体価格54,000円+税

※内容は予告なく変更する場合がございます。

CD-ROM

●導入用スライド

新しい試みとして、授業の導入で使えるパワーポイントのデータを収録しました。そのままでも、編集し直してもご使用いただけます。

CD-ROMには、他にも、年間指導計画に役立つ資料や、デジタル鑑賞図版、全国の美術館・工芸館ガイドなどを収録しています。

美術準備室 No.8

2015(平成27)年12月21日

発行人 ■ 常田 寛
発行所 ■ 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話：03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■ Better Days
(大久保裕文+小倉亜希子+深山貴世)
印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社

学習指導書別冊・朱書



学習のねらいがわかりやすく、授業の展開がイメージしやすい紙面になりました。作家や作品の解説に加え、関連資料へのリンクも記載しています。

特集

抽象的な作品を感じ取る

アトリエ訪問

美術家 横尾忠則

作家の肖像

陶芸家 濱田庄司

放課後ART

- 広島県広島市立 二葉中学校
- FlatHOME@グンダイビジュツトクシ

この1点

「大家族」
佐野史郎

アトリエ 訪 問

約束の時間に、横尾忠則は自転車に乗って現れた。赤いマフラーに顔をうずめ、「自宅はここから近いんですよ」と話しながら、やさしくアトリエへ招き入れてくれた。

撮影 永野雅子

第 8 回

横尾忠則

美術家

壁いっぱいの大きな窓を開けると、小鳥のさえずりが聞こえる。広いベランダは緑樹に囲まれ、まるで森の中にいるようだ。思わず、ここが東京であることを忘れてしまう。

——気持ちのいいアトリエですね。

横尾 窓を開けっ放しにしていると、鳥が入ってきたりしますよ。ベランダでは、本を読んだり、ちょっとしたアイデアを考えたりします。

ここは、建築家^{いそぎあらた}の磯崎新さんにつくってもらったんです。磯崎さんは、昔から親しくしているし、アトリエ

というものをよくわかっていらっしゃる方だから、僕のほうから「ここはこうしてほしい」と説明したり、何か注文したりすることはありませんでした。アトリエっていうのはね、何もないほうがいいんです。建築的な見せ場をつくってしまうと、使い勝手が悪くなってしまいます。だから、ここは、磯崎さんの「箱」の作品です。

実は最近、改築したんですよ。年を取るごとに、もっと太陽光線を浴びたいと思うようになって、壁を取っ払って窓を広くしました。そして、

天井が高くて寒かったので、低くしました。今の自分の肉体に合わせた空間に変更してもらったんです。

——CDがたくさんありますが、音楽を聴きながら制作されるんですか。

横尾 昔は、音楽がないと絵が描けないくらいだったんですが、最近、耳鳴りと難聴がすごいです。耳の中で蝉がジューッと鳴いていたり、圧迫感があったり、そんな感じです。だから、今は音楽をかけることが億劫になっています。音楽が雑音にしか聴こえない。

実は、30年ぐらい前からよく耳の





「やっぱり、 絵は肉体で描かなきゃ」

絵を描いていたんですよ。こうなることを無意識に感じていたのかな。——耳鳴りによって、作品に変化が生まれたりするんでしょうか。

横尾 ははは。耳の不自由さが、絵の自由さにつながってくれたらいいですけどね。耳もそうだけど、身体

の調子と創作活動は分けて考えられないと思います。よく絵を観念的に捉える人がいますが、絵は肉体的なものです。「自分はこういう考えに基づいて、こういう絵を描きました」と説明をするアーティストがいるけれど、それなら描かなくていいんじゃないかと思います。逆に、自分が何を考えているかわからないか

ら描くんだと。描いてから「あ、自分はこういうことを考えているんだ」ってわかる……そういうものだと思います。やっぱり、絵は肉体で描かなきゃ。

近々、アトリエの地下にピンポン台を入れる予定です。運動不足だから、体力をつけるために（笑）。

次の作品は、あの大きなキャンヴァス（縦2mほどの画布を指して）に描いてみようと思っています。今の自分の体力で描けるのかどうか、試すためにもね。

——作品、とても楽しみにしています。最後に、美術の先生方にメッセージをお願いしますか。

横尾 僕は「自由に生きること」がいちばん大事だと思っています。だから、子どもたちには、絵で自由な感覚を身につけてほしいと思います。とにかく自分の思いの丈を画面に吐

き出してみしてほしい。それと、絵は知識や教養のためにあるわけではないから、評価は後回しでいい。モネとマネの区別がなくなっていくんです。そういうことを、先生が言葉だけでなく、身体を使って教えていくことが必要だと思います。

何かのために絵を描くとか、何かのために絵を見るんじゃない。そういう大義名分があってははいけません。もっと自分の身体を感じて、信じて。そして、自由に。そんなふうに思います。



アクリル絵の具を使うときは、紙皿をパレット代わりにしている。



大きな窓から光がたくさん差し込む。ライトをつけなくても、室内は明るい。



NYの個展のため、作品は出払っている状態。「そろそろ次の絵に取りかかりたい」と横尾さん。

よこお・ただのり

1936年兵庫県生まれ。美術家。ニューヨーク近代美術館、ステデリック美術館など内外の美術館で個展を開催。パリ、ベネチア、サンパウロなどのビエンナーレに出品。小説『ぶるうらんど』では泉鏡花文学賞受賞。2012年、神戸市に横尾忠則現代美術館、13年、瀬戸内海の豊島に豊島横尾館が開館。毎日芸術賞、紫綬褒章、旭日小綬章、朝日賞など受賞多数。15年9月には、高松宮殿下記念世界文化賞を受賞した。

特 集

抽象的な作品を 感じ取る

「抽象的な作品を鑑賞させるのは難しい」。

そのように感じられる先生は多いかもしれません。

しかし、子どもには、私たちが思う以上に自由な発想で作品を鑑賞する力があります。

本特集では、生徒たちが抽象的な作品からさまざまな想像を膨らませていきます。

さて、先生はどのように彼らの力を引き出していったのでしょうか。

撮影 鈴木俊介



作品を真横からじっと見つめる生徒。

※今回は、学芸員立ち会のもとに鑑賞の授業が行われました。
通常は作品の保護のため、壁に身体をつけて鑑賞することはできません。



展示室に入る前に、
これまでの授業の
振り返りをする。

授 業 リ ポ ー ト

目に見えないものを見よう!

大分県大分市立^{あけの}明野中学校

佐藤 誠^{先生} × 1年1組^(生徒数 30 名) × 大分県立美術館

授業の舞台は、大分県立美術館。

2015 年春にオープンした当館は教育普及活動に力を入れている。子どもたち向けのワークショップを企画するのももちろん、学校の授業での活用も積極的に受け入れている。

今回は、大分市立明野中学校の生徒たちが美術館を訪れ、コレクション展を鑑賞する。彼らは本物の作品を前に、どのような反応を示すのだろうか。

前時を振り返ろう

生徒たちは、前時までに抽象画の制作をしている (P6-7 参照)。「音」を点・線・面で描いたり、「自分の手から聴こえる音楽」を色鉛筆を使って表現したりしてきた。また、それらの作品をみんなで鑑賞し、それぞれの作品から感じたことを付箋紙に書いて貼るという鑑賞活動も行っている。生徒たちは、「音」という

目に見えないものを形や色で表すおもしろさや、抽象的な作品を鑑賞する楽しさを体感してきている。

佐藤先生は、美術館の展示室に入る前に、まず生徒たちに向かってこう切り出した。

「これまでの授業を振り返りましょう。スケッチブックを開いてください」

生徒たちは、自分の作品と、友達のコメントが書かれた付箋紙が貼ってあるページを開く。

「前の時間に、描いた作品をみんなで見合いましたね。付箋紙の友達のコメントをちょっと読んでみてください。描いた自分の意図とは全然違うことが書いてあったりするでしょう。作品は、作者の手を離れると、鑑賞者が自由にさまざまな見方をします。それが、美術鑑賞のおもしろさです。これから、展示室に入って作品を鑑賞してもらいます。これま

で、『目に見えないものを見る』というテーマで授業をしてきました。最初の授業で、みんなは『目に見えないもの』として、音、におい、風、感情などを挙げてくれました。今日も作品から、それらのことを自由に感じ取ってほしいと思います」

そして、生徒たちはスケッチブックを閉じ、ワクワクした表情で、展示室へ入っていく。



スケッチブックには、
「自分の手から聴こえる音楽」を
描いた作品と、
友達のコメント (付箋紙)
が貼られている。





高山辰雄の迫力ある作品に、生徒たちはしばし目を奪われる。

地元の作家の作品を鑑賞しよう

展示室に入ると、大きな3対の作品が目飛び込む。先生は、その前に生徒たちを集めた。

「この絵の作者が誰かわかるかな？」という問いに、生徒は「高山辰雄さん！」と即答する。日本画家・高山辰雄は、大分県大分市出身。県内では、毎年「高山辰雄ジュニア美術展」が開催されるなど、生徒たちにとって、最も身近な作家の一人だ。今回の授業は、抽象的な作品を主

体的に鑑賞することがねらいだが、佐藤先生はあえてこの具象画を取り上げた。生徒たちにとって身近な作家の作品であることと、この作品は線画で色がほとんど使われておらず、具象画でありながら、抽象画に近いのではと考えたためだ。

「作品をよく見てください。さあ、何が見えるでしょう」と先生が投げかけると、生徒たちは、「牛」「女性」「太陽」「星」など、見たままに次々と意見を述べていく。

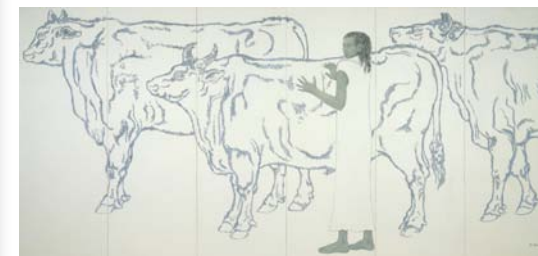
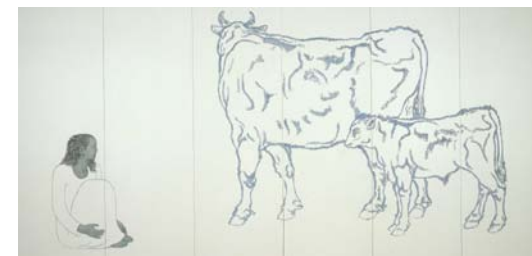
「牛がいて、女性がいる。これ（中央の絵に丸く描かれているものを指

して）は、太陽か星かよくわからないけど、何かが宙に浮いている。じゃあ、みんな、この絵から何が感じ取れる？ 前の授業で、友達作品を鑑賞しましたね。作品から音楽や感情を感じ取りました。そのときと同じように感じてみよう」。先生がそう問いかけると、生徒の発言は、徐々に「目に見えないもの」へシフトしていく。

生徒1「悲しい」

生徒2「牛と仲良し」

生徒3「孤独」



「明星」高山辰雄 紙本彩色 左右各171.3×356.0cm 中央210.7×139.0cm 1985年

生徒4「寂しい」

先生「三つの絵があるけど、どうなんだろう」

生徒5「ぜんぶ同じ人」

先生「なるほど。『ぜんぶ同じ人』と思う人は手を挙げてみて」

（複数名の生徒が挙手）

先生「そうか。じゃあ、同じ人ってことは、この3枚の絵は場面が違うのかな」

女性の心情について考え始めた生徒たち。そして、先生が「場面」という言葉を出したことにより、さらに見方が深まっていく。

生徒6「（右から絵を順に指して）

初め・中・終わりになっているんじゃないかな」

先生「物語になっているってこと？」

生徒6「そう。（右の絵を指して）初めに牛と出会う、（中央の絵を指して）仲良くなって、そして（左の絵を指して）お別れ」

この発言が引き金となって、生徒たちは、3枚の絵からストーリーを紡ぎ始める。先生は、太陽のような星のような丸いものが描かれている中央の絵を指して、「物語なのだとしたら、この絵の時間はいつだと思う？」と投げかけた。

生徒7「親に見捨てられた少女が牛と遊んでいる場面。寂しいから夜だと思う」

生徒8「わたしには月が光を放っているように見える。女性は、胸に

手をあてて悲しい気持ちでいるような気がするから、夜だと思う」

生徒9「月だったら、白く描くんじゃないかな。だから、これは太陽」

生徒10「明るい感じがするから、昼間だと思う」



特集
抽象的な作品を感じ取る

授業展開（全7時間） 生徒の活動

第1時【導入】

「音」を描く

- オノマトペの「音」を聴き、点と線で描く。次に、点と線と面で描く。
 - R. シュトラウスの「アルプス交響曲」を聴き、点と線と面で描く。
- 【指導上の留意点】点・線・面の描画のさまざまな例を示す。筆圧・太さ・繰り返しの効果を工夫することや、定規やコンパスを活用することを伝える。

第2～4時【表現】

「手から聴こえる音楽」を描く

- 自分の心情を表す手のポーズを考えさせ、ゆっくり1本の線で陰影をつけずに描く。
- 手から発想して音楽を感じ取り、色鉛筆などを使って表現する。

【指導上の留意点】手の形を延長した線や動きの線で画面分割していく手法、リズム・和音・強弱といった音楽の要素を、筆圧や塗り重ねによって表現することを例示する。



生徒作品

第5時【鑑賞】

鑑賞会をする

- 作品を机の上に置き、友達作品を見て回る。
- 友達作品から感じ取ったことや、聴こえてきた音楽を付箋紙に記入し、作者の机の上に貼り付ける。

【指導上の留意点】鑑賞させる前に、音楽を表す言葉（調和・緊張感・奥行・強弱・響き…など）を示す。また、鑑賞は静かな環境で行い、作品から聴こえてくる音楽に耳をすまそう伝える。

鑑賞会の様子



第6時【鑑賞】

美術館で鑑賞する

- 美術館へ行き、地元の作家の作品や、抽象的な作品を鑑賞する。（今回、紙面でご紹介しているのは、第6時の様子です。）

第7時【まとめ】

自分の考えをまとめる

- 美術館で鑑賞した感想や、これまでの授業の感想を、ワークシートに記入する。
- 【指導上の留意点】ワークシートには、美術館から借りた図版を使い、生徒が作品を思い出しやすいようにする。

指導計画

準備するもの 生徒：筆記具、色鉛筆、定規、コンパス
教師：音源、付箋紙、画用紙、抽象的な作品の図版

学習目標 ● 「音楽」や「手」から感じ取ったことや想像したことを基に、形や色を工夫して表現することができる。
● 抽象的な作品を、主体的に鑑賞することができる。

評価規準 ● 目に見えないものを表現することを楽しみ、また抽象的な作品を鑑賞して味わおうとしている。（美術への関心・意欲・態度）
● 音楽や自分の感情などから発想を広げている。（発想や構想の能力）
● 偶然にできる形や色の効果を生かしている。（創造的な技能）
● 形や色の使い方や表現の工夫について話し合ったり、抽象的な表現からイメージを広げたりするなど、主体的に作品を鑑賞しようとしている。（鑑賞の能力）



作品から物語を想像し始め、生徒たちは熱気を帯びてくる。

生徒 11「(右の絵を指して) 朝に出会って、(中央の絵を指して) 昼に遊んで、(左の絵を指して)、 夜に別れる」

中央の絵については、夜の場面か昼の場面なのかで、意見が割れた。そして、やや沈黙があった後、ある生徒が口を開いた。

生徒 12「先生、(左の絵を指して) 子牛が泣いているように見えませんか」
(他の生徒たちも、次々に「見える」と同意する)

先生「子牛が泣いている？ なぜ？」

生徒 12「別れが寂しい」

生徒 13「牛に子どもが生まれて、女性と別れることになったから」

先生「(右の絵を指して) 牛と出会って、(中央の絵を指して) 仲良くなって、(左の絵を指して) 子どもが生まれた。……ということは、この3枚の絵には、長い時間が流れているのかな」

「長い時間」という先生の言葉に、生徒が「あっ！」という顔をした。

服装の違いに気づいた生徒たち。授業はどんどん盛り上がり、作品からさまざまな物語が生まれる。

先生は一通り意見を聞いたところで「みんな、この作品からいろいろなことを感じ取ってくれましたね。今日は学芸員さんが来てくれていますので、高山辰雄さんのことや、この絵について少し教えてもらいましょう」と告げた。

そして、学芸員の吉田さんが、作品の題名は「明星」であること、高山は天文学に興味を抱いていたことなどを説明。また、中央の作品だけが縦長なのは、横長の2枚の絵の間に縦長の画面を挟むことで、空間の広がりを出したいという作者の意図があることを説明した。さらに、「高山辰雄は、目で見たものを描く人ではなく、自分の心を描く人でした。ですから、この作品も実際にこういう風景を見て描いたのではなく、高山さんの心の中を描いたのだと思います」と話した。

先生は「今のお話を聞いて、もう一度、この作品を感じ取ってみてください。高山さんの心の中に入り込んでみましょう」と言い、3分ほど時間をとった。

生徒たちは、絵をじっと見つめ、心地よい静寂の時間が流れた。



学芸員の説明に耳を傾ける生徒たち。

生徒 14「先生!これ春夏秋冬だと思います」

先生「四季を描いているってこと？」

生徒 15「服装が、右から、半袖→半袖→長袖になっているでしょう」
(他の生徒たちから「おおっ」と歓声上がる)

先生「なるほど。じゃあ、これ(右の絵)の季節はいつ？」

生徒 16「夏!」

生徒 17「いや、出会いの春だよ」

先生「じゃあ、中央の絵は？」

生徒 18「夏」

先生「じゃあ、左の絵は？」

生徒 19「秋か冬」

抽象画を鑑賞しよう

次に、抽象的な作品が展示されている部屋に移動。先生は「部屋をぐるっと見渡して、気になる作品を指でさしてみて」と言った。すると、多くの生徒が画面いっぱいに水色の絵の具が力強く塗られた作品を指した。

「じゃあ、この大きな作品を鑑賞しよう。近くで見たり、下からのぞきこんだりしてごらん」。先生がそう告げると、生徒たちはさまざまな角度から作品を見始める。「どうですか？何を感じましたか」と先生が問いかけると、生徒たちは次々と意見を出していく。

生徒 1「おたまじゃくしが、下から上に、わーっと集まっている感じ」

生徒 2「雨だと思う」

生徒 3「(手を上下にうねるように動かして) 波のよう」

生徒 4「ゴツゴツした感じ」

先生「どんな音が聴こえる？」

生徒 5「ザーッという雨の音」

水のイメージで発言する生徒が多く、先生はあえて「水以外だったら、何に見える？」と尋ねた。

生徒 6「光」

先生「どこからそう思うの？」

生徒 7「上のほうでパーッと光が出て。それで、周りに広がっていく」

先生「このボコボコしたところから、光がパーッと出て、下に落ちるイメージ？」

生徒 7「はい。(と言いながら、手を頭の上に広げて、ひらひらと下に落ちていく動作をする)」

生徒 8「ああ、花火だ」
(他の生徒も「そうだそうだ」と同



「小さな生き物が上に向かって動いているみたい」。作品を見上げながら感想を漏らす生徒。

意する)

先生「花火ってことは、暑いの？」

生徒 9「いや、暑いけど涼しい」

先生「温度は？」

生徒 9「冷たい」

生徒 10「ひんやりした感じ」

作品のデコボコした部分から光を感じ始めた生徒たち。先生は「光や音、温度を感じたみたいだけど、作者の気持ちを感じた人はいる？」と投げかける。

生徒 11「悲しい」

生徒 12「失恋」

生徒 13「苦しい」

生徒 14「孤独」



「月光 (六)」菊畑茂久馬
油彩、キャンヴァス
260.0×194.0cm 1986年



特集
抽象的な
作品を
感じ取る

生徒 15「気持ちが高ぶっている」
先生「気持ちが高ぶっているって、
どういうこと？」
生徒 15「ストレスを発散したいと
いう気持ち」
生徒 16「しがらみから逃げたい気
持ち」

先ほど「花火」という発言があっ
たからなのか、エネルギーが内から
外に向かっていくイメージで、作者
の心情を想像していく生徒たち。ま
た、作品のゴツゴツした質感や、グ
レーがかった水色の色彩から、悲し
みや苦しみという作者の感情を想像
していく。

授業が終盤に近づき、学芸員の吉
田さんが、この作品の題名は「月光
(六)」で、作者は現代美術家の菊
畑茂久馬であることを告げた。シリ
ーズ作品であることや画材について
の説明をした後、「このような抽象
画は、20 世紀になってから描かれ
るようになりました。色と形の組み
合わせ、質感などが工夫して描かれ
ているので、この部屋の他の抽象作
品も見て、そのおもしろさを感じて
もらえたらうれしいです」と話した。
「それでは、最後の課題です。こ
の部屋にはたくさんの抽象的な作品
があります。5 分とりますので、自

チョコレートのような質感の作品「内と外」
(白野文敏)を前に、「チョコの匂いがしそう!」。



分がいちばん気になる作品をじっく
り鑑賞してください」。先生がそう
告げるやいなや、生徒たちはうれし
そうにあたりを見回して、気になる
作品に向かう。

横からのぞきこむように鑑賞する
生徒、顔を近づけて作品の質感を確
かめる生徒、「なんでこうなってる
んだろうね」と友達と話し合いなが
ら鑑賞する生徒、それぞれ思い思い
の方法で作品を鑑賞していく。

キャンヴァスいっぱい茶色の絵
の具が塗られた作品を鑑賞していた
生徒は「チョコレート匂いがしそ
う」と、鼻を作品に近づけていた。
また、黄色の毛糸が張り巡らされた
作品をじっと見つめていた生徒は、
「毛糸が使われていておもしろい。
ずっと見ていると吸い込まれそう。
太陽みたいだと思った」と話した。

そして、終業の時間が近づく。全
員で学芸員の吉田さんに御礼の挨拶
をした後、先生が、「あと少しだけ
時間が余っているけど、どうしやう
か」とつぶやくと、生徒たちから「も
っと鑑賞したい!」「他の作品も見
たい!」という声。

生徒たちは、学校へ帰る時間ギリ
ギリまで作品から離れず、友達と意
見を言い合いながら、うれしそうに
鑑賞していた。



上／李禹煥の作品「照応」について、
友達と意見を交わす。
下／毛糸が縦横に張り巡らされた作品
「月の影;□○▽」(吉村益信)を
間近でじっと見つめる。

特集
抽象的な
作品を
感じ取る

私はこう感じました ―二つの作品を鑑賞して 生徒たちが書いた鑑賞文の中から、一部をご紹介します。



H君

こ の3枚の絵は、いろいろな物
語を描いていると思います。
じっと見ていると、疑問に思ってい
たことがだんだん解けていきまし
た。トリックの謎を解いているみた
いで、すごくおもしろかったです。

Yさん

長 い季節の流れを感じました。
クラシックの音楽が流れてい
て、無表情に見える女性からも、悲
しい、楽しいという感情が伝わっ
てくるような気がしました。

S君

そ よ風、草原の匂い、出会いと
別れ、悲しみ、静かな時間
……そんなことが思い浮かびまし
た。

Iさん

中 央の絵は、女の子が星に何か
を願っているのではないかと
思いました。右から左にかけて、出
会いから別れまでを表していて、こ
の3枚の絵は1年を通した物語なの
だと思いました。

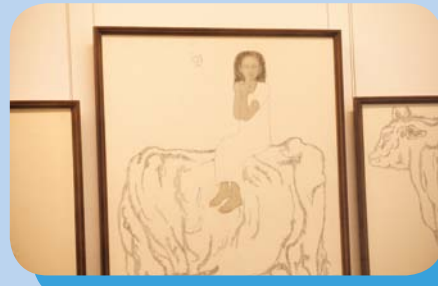
Hさん

悲 しさや苦しみの音がします。
風は吹いていなくて、木や林
もなくて遠くまで見渡せる感じがし
ます。砂のにおいがしそうです。

Aさん

静 かで穏やかな音が聞こえまし
た。別の世界での生活風景と
いう感じがします。

「明星」



「月光(六)」



Sさん

絵 の具の流れが下に向かってい
たので、人の涙が下に落ちて
いるように見えました。でも、上
の方が光って見えたので、希望と絶望
を表しているのだと思いました。

Iさん

雨 が地面に叩きつけているよう
な感じで、「ザアッ」とす
ごく大きな音が聞こえてくるような
感じがしました。

Hさん

ど こか泣いているような感じが
します。雨の中で傘をさして
泣いている感じです。

O君

ボ コボコした部分から、激しく
光が広がっていく感じがしま
した。

Yさん

凸 凹になっているところから、
ボコボコと音が聞こえるよう
に感じられました。

Kさん

こ の作品は人の感情を表してい
ると思います。上のツブツブ
したところはワーンという感じで、
下はシュンとした感じ。

R君

上 の部分がブツブツしていて、
激しい感じがしたけれど、色
合いから、とても悲しい印象を受け
ました。



Yさん
自分は「こう見る!」と思っていても、他の人の意見を聞くと全然違う絵に見えてきました。カラフルな絵、シンプルな絵、デコボコした絵、たくさんの絵があって、それぞれ印象が全然違うのでおもしろかったし、絵への関心が高まりました。



Mさん
今まで「目に見えないものは何か」と考えたり、描いたりしたことはありませんでした。だけど、音を描く授業や、美術館での鑑賞を通して、目に見えないものを描いたり見たりすることの楽しさを知りました。作品をつくること、作品を見ていろいろなことを感じるのが、今まで以上に好きになりました。



「目に見えないものを見る」って おもしろい!

「目に見えないものを見る」というテーマで、授業に取り組んできた生徒たち。「音」を聴いて抽象画を描いたり、抽象的な作品を鑑賞したりしてきました。その感想をご紹介します。

Kさん
これまで絵を鑑賞するときは、「ただ見る」という感じだったけど、今回は「感じる」という目的で見たから、絵からいろんなことを感じることができました。また絵を見に行くことがあったら、今日みたいに絵から、いろんなことを感じたいと思います。

M君
目に見えないものを描くことで、これまで見えなかったり考えもしなかったものを見ることができました。自分の新しい世界観が生まれたような気がしました。



Tさん
見えないものを自由に描くのが、とてもおもしろかったです。色や形、大きさが人によってさまざまで、その人の個性が出ていていいなと思いました。見えないからこそ自由に描けるということが、すごくおもしろかったです。

美術館より

今回、授業にご協力いただいた大分県立美術館の副館長・加藤さんと、授業に参加していただいた学芸員の吉田さんにお話を伺いました。

「自分たちの作品」に 会いに来てほしい

副館長 加藤康彦

今回の授業を参観して、子どもたちが作品を実にきちんと見ていることに驚きました。高山辰雄の「明星」では、描かれている女性の服の袖の丈が違うことに気づき、そこから季節の移り変わりを想像する……とても新鮮な見方で、おもしろいなと思います。

当館はオープンしてまだ半年余りですが、県内の小学生を全員美術館に招待するなど、子どもたちが美術に慣れ親しむ機会を多くつくっています。ですから、今回のように先生が美術館で授業してくださるのは大歓迎です。

授業の中で、佐藤先生が聞かけると、子どもたちが活発に、どんどん意見を出していたのが印象的でした。

た。普段から子どもを見ておられる先生だからこそ、子どもたちの心の中に入り、言葉を引き出すことができるのだと思います。美術館で授業をする際、学芸員にすべてお任せされる先生がいらっしゃいますが、それはもったいないことです。ぜひ先生ご自身の言葉で作品を紹介していただきたい。そのほうが絶対、子どもたちの心に響きますから。

公立美術館の所蔵作品は、言わば「みんなの作品」だと、私は思っています。ですから、「美術館に作品を見せてもらう」のではなく、「自分たちの作品に会いに行く」という気持ちで美術館にお越しいただきたいなと思っています。

美術館の作品は「自分たちの作品」、美術館は「自分たちの場所」。そういう意識を、ぜひ先生から子どもたちに伝えていってほしいですね。それが、美術館のあり方、ひいては

美術鑑賞のあり方を変えていく、大きなきっかけになると思います。(談)

抽象画を熱心に 見てくれてうれしかった

主任学芸員 吉田浩太郎

授業の前は、抽象画に拒否反応を示す子がいるのではと考えていましたが、そんなことはまったく驚きました。かえって、大人のほうが難しく考えてしまうのかもしれないね。「月光(六)」に、光や冷たさを感じるなど、熱心に作品を見てくれたのが印象的でした。授業が終わった後、生徒さんたちが「もっと見たい、また来たい」と言ってくれたのが、何よりうれしかった。ぜひまた作品に会いに来てほしいと思います。(談)

大分県立美術館

大分の竹工芸をイメージさせる外観が印象的な建築は、建築家・坂 茂の手によるもの。1階には、展示室と外から中の様子がわかるようガラス張りのアトリウムが設けられている。2階には、カフェや教育普及活動を行うアトリエ、体験学習室があり、3階にはコレクション展示室がある。大分にゆかりのある作家の作品を多く所蔵しており、コレクション展は約2か月に1度、展示替えが行われる。『Oita Prefectural Art Museum』の頭文字O・P・A・Mをとって「OPAM(オーバム)」という愛称で親しまれている。

〒870-0036 大分市寿町2-1
Tel 097-533-4500



特集
抽象的な
作品を
感じ取る



授業を終えて

今回、授業をしていただいた佐藤先生に感想をお聞きました。

抽象的な作品を主体的に感じ取ってほしい

「抽象的な作品を主体的に感じ取ってほしい」。そんな思いで、「目に見えないものを見る」という授業に長年取り組んできました。

まず、「自分の手から聴こえる音楽」を描くという表現活動をした後、互いの作品を見合う鑑賞会をしました。抽象的な作品は、具象的な作品と違い、技術的な上手・下手にとらわれずに鑑賞できることに、大きな意味があると思っています。鑑賞会は、友達作品を見てそこから聴こえる音楽を想像したり、友達の書いたコメントを読んだり、とても充実した時間となりました。

そして今回は、美術館での鑑賞も取り入れました。授業の数日前に下見に行ったのですが、展示室に入っ

てすぐの高山辰雄の作品「明星」に圧倒されました。生徒たちのことを考えると、この作品を素通りすること

はできないと考え、抽象的な作品ではありませんが、あえて取り上げることにしました。授業の中では、ついこの作品に時間をかけてしまいましたが、それは、学芸員さんがつくった美術館の空間の中で自然な流れであったと思っています。



抽象的な作品の展示室に入り、生徒たちに「気になる作品は？」と聞

いかけると、思った通り多くの生徒が「月光（六）」を指さしました。前日に学芸員の吉田さんから「抽象作品の部屋はマチエールのおもしろさにこだわって展示している」と聞いていたので、何とかこの作品の凸



凹とした力強い表現を体験させたい

と思い、いろいろな角度から見させるようにしました。

美術館での鑑賞のよさは、何より美術館という空間の中で本物の作品とじっくり向き合うことができるところにあります。「明星」と「月光（六）」を鑑賞した後、最後の5分間は自由に鑑賞させました。「気になる作品をじっくり鑑賞してごらん」と言うと、生徒が、パンッと弾けるようにいろいろな作品の前に迷いなく駆け寄っていきました。美術館で鑑賞の授業をするのが初めての生徒たちだったので、正直どのような反応をするのか不安だったのです



佐藤誠
さとう・まこと

大分県生まれ。大分市立明野中学校教諭。大分大学教育学部卒業。大分県中学校文化連盟事務局長、大分県造形教育研究会副事務局長、大分県中学校教育研究会美術部会事務局員を務める。美術教育研究会AENET所属。

光村図書中学校『美術』の著作者である上野行一先生に、今回の授業を参観していただきました。

授業を参観して



上野行一
うえの・こういち

大阪府生まれ。大阪教育大学大学院修了。広告デザイナー、公立学校教諭、高知大学教育学部教授、帝京科学大学教授などを務める。著書に、『私の中の自由な美術』『風神雷神はなぜ笑っているか』（光村図書）など。光村図書中学校教科書『美術』の著作者でもある。

美術館でしかできない学習

一昨年来、私たち科研チームは、秋田県教育センターの指導主事さんや県内の先生方のご協力を得て、学校と美術館の連携による鑑賞の授業づくりを行ってきました（※）。

小・中・高の授業実践を通して得られた見識の一つは、「教室で図版やレプリカを使って行う授業と同じことを美術館でするのはもったいない。ふだん教室ではできないことをやろう」ということです。

そのための手立ては六つの項目に整理しましたが、ここでは「事前に美術館での授業に意欲をもたせる」「美術館での作品の出会い方を工夫する」「学芸員の専門性を活用する」の視点から佐藤先生の授業を振り返ってみましょう。

見えないもの（音）を表すという学校での表現の授業を事前授業として、生徒は美術館で抽象作品から音や光、感触、そして作者の心など見えないものを感じ取る鑑賞の学習をしました。表現と鑑賞を関係づけながら、「学校—美術館—学校」という「授業の連携」が指導計画されているのです。「事前に美術館での授業に意欲をもたせる」ためには、生徒の主体的な取り組みにつなげるための「授業の連携」が大切なのです。

「美術館での作品の出会い方」にはどのような工夫があったのでしょうか。生徒は美術館でまず高山辰雄の作品を鑑賞しています。愛着のある地元作家の作品で対話による鑑賞を行うことによって気持ちが楽になり、心が解放された状態で抽象作

品と出会えるように工夫されているのです。

P4の写真をご覧ください。この生徒は何をしているのでしょうか。疲れて壁に寄りかかっているのではありません。彼はほとんど真横から絵の表面を凝視しているのです。教室で図版を見る授業ではこのような見方はできません。凝視は作品の細部を見るだけでなく、絵の具の塗り方や重なり方、彫り跡や材料の使い方などの情報を得たり、そこから作家の制作過程を想像したりすることができ

る見方です。このように上から下から斜めからとさまざまな角度から作品を見ることや、近寄って凝視することは、美術館だからできる見方であり、学習であるといえます。「月光（六）」を鑑賞する際に佐藤先生は「じゃあ、この大きな作品を鑑賞しよう。近くで見たり、下からのぞきこんだりしてごらん」と指示しました。すると、生徒たちはさまざまな角度から作品を見始め、次々と意見を出してきます。教室ではできない見方を意図的に指示することによって、多様な見方が生まれたのです。

作品ごとに学芸員さんが最後に解説をしているのもいいですね。教師と学芸員それぞれの専門性の連携によって、美術館でしかできない学習は生まれるのです。

※科研費（基盤研究B）「学校と美術館の連携による美術鑑賞教育モデルの開発」（研究代表者）上野行一（研究分担者）一條彰子、岡田京子、奥村高明、東良雅人、山崎正明



特集
抽象的な作品を感じ取る

作家の肖像

第 8 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



1894-1978
濱田庄司

はまだ・しょうじ

1894年神奈川県生まれ。陶芸家。東京高等工業学校の窯業科を卒業後、京都陶磁器試験場に入所。1920年バーナード・リーチとともに渡英。帰国後、栃木県の益子へ居を移し、以後活動の拠点とする。民藝運動を推進した中心的存在。61年には日本民藝館館長に就任。77年、益子参考館（現・濱田庄司記念益子参考館）を開館。84歳で死去。

不思議なギャップ

陶工・濱田庄司に会ったのは、今から30年以上前です。私が当時勤めていた美術館でお見かけしたのですが、その印象は鮮烈でした。

そのときの濱田は、英国仕立ての淡いベージュのスーツをピシッと着こなし、実に洒落ていました。また、お話好きで、あたりがぱっと明るくなるようなやわらかい空気を発していました。

一般的な彼のイメージというところ、「作務衣を着て、寡黙に轆轤を回す益子の陶工」というものかもしれません。しかし実際の濱田は、モダンなたたずまいをもつ、能弁な国際人。その不思議なギャップが、私に強い印象を残しました。

すばらしい鑑識眼

濱田は、東京高等工業学校（現・東京工業大学）窯業科を卒業後、同科の先輩である河井寛次郎（※1）が勤める京都陶磁器試験場に就職。そこで、河井と共に、釉薬の研究や轆轤の修技に邁進します。その後、英国のセント・アイヴスに渡り、親友であるバーナード・リーチ（※2）と、4年にわたり作陶を続けます。自然豊かな港町、セント・アイヴスに滞在し、濱田は田舎での生活に心惹かれたのでしょう。帰国後は、益子に住居と仕事場を構えます。

私は時々、益子にある、濱田の自邸を改築してつくられた「益子参考館」へ行くのですが、そこには彼の作品だけでなく、彼がコレクションしていた工芸品も展示されており、目を奪われます。濱田は、柳宗悦（※3）、河井寛次郎らと「民藝運動」を

起こし、さまざまな国や地域の工芸品を収集しました。集められたものを見ると、すばらしい鑑識眼で、工芸品に対して愛情をもっていることが伝わってきます。それらをじっと見ていると、濱田自身の作品にも見えてくるから不思議です。

線が「動いている」

彼の作品に初めて出会ったときのこととも忘れられません。大胆に流掛が施された大皿を目にし、底知れない力を感じました。まるで、皿の上で線が動いているような、強いエネルギーがありました。

彼は柄杓に釉薬をすくい、大皿に向かって一気に15秒ほどで流し掛けます。それを見た人が「あまりにも早すぎて物足りなくはないか」と問うと、彼は「15秒プラス60年と見たらどうか」と答えたそうです。濱田は、自然に任せて作陶しているように見えますが、決してそうではありません。河井と釉薬の研究・調査を重ねたり、リーチと実験的に作品をつくったり、非常に研究熱心な人でした。その鍛錬のうえでの15秒なのです。濱田の作品を前にすると、そのことを感じずにはいられません。（談）

※1 河井寛次郎（1890-1966）
陶芸家。京都に窯を築き、独自の技法と作風をつくりあげ、近代陶芸の新境地を開いた。
※2 バーナード・リーチ（1887-1979）
陶芸家。香港生まれのイギリス人。東洋と英国の陶技を融合した作品を残す。
※3 柳宗悦（1889-1961）
思想家。民衆的工芸の意から「民藝」という造語をつくり、日常道具にこそ美しさがあると唱えた。

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



上／青釉黒流掛鉢

益子 直径50.8×高さ11.3cm 1956年
濱田が得意とした「流掛」。見事な陶技と偶然性によって、躍動感あふれる線が生まれる。

左／塩釉押文花瓶

益子 直径19.0×高さ33.0cm 1955年
ドイツで始まったと言われる塩釉の技法を、濱田は日本でいち早く取り入れた。

中央／地掛鉄絵泰文茶碗

益子 直径12.0×高さ10.5cm 1955年
濱田がサトウキビ畑を見て描き出したと言われる「泰文」が施された茶碗。「泰文」は、彼が生涯愛した文様。

右／赤絵丸文急須

益子 直径13.5×高さ8.5cm 1938年
赤絵は、沖縄に滞在していた際、琉球赤絵に影響を受け、好んで使っていた技法。

（すべて日本民藝館蔵）

美術部へようこそ! ●広島県広島市立二葉中学校

2年に1度、国際アニメーションフェスティバルが開かれる広島市。
二葉中学校が毎年取り組んでいるアニメーション制作の活動についてご紹介します。

平和・広島をテーマにしたアニメーション

国際平和文化都市・広島市では、2010年より広島国際アニメーションフェスティバル(※1)実行委員会と連携し、「平和・広島をテーマにしたアニメーション制作支援事業」を行う。機材の貸し出し、スタッフの派遣など、中学校・高等学校でのアニメーション制作を支援する本事業。完成作品は同フェスティバルの応援イベントで上映される。

この事業に、開始当初から関わる美術部がある。広島市立二葉中学校美術部だ。「平和の尊さを後世に伝えることは、広島で生まれ育った私たちだからこそできること。前任校の美術部で、平和をテーマにしたアニメーションを作ったことがあるんです。BGMに、『ねがい』という曲(※2)を使って。本校へ異動後、それを部員たちに見せたのがこの活動の始まり」と振り返るのは、顧問の石原真理先生。自分が描いた絵が動く——生徒たちの関心は大きく、部の中心的な活動として制作に取り組むことになった。

一人きりではできない

部員は28名。10名ほどずつに分かれ、グループで協力しながら、約3か月かけて一つの作品を完成させる。制作の第一歩は、「ねがい」

の歌詞をもとにしたストーリーづくり。平和を願う心をより深く理解するために、被爆体験の語り部の方の話を聞くこともある。そうして絵コンテが仕上がったら、原画の作成に入る。分担しながら、トレース台を使って、コマごとに動かした絵を手で描いていく。1分間のアニメーションに必要な原画は、約200枚。それらをデジタルカメラで1枚ずつ撮影してパソコンに取り込み、先生が編集して動画にする。

原画の手描きは、石原先生が大切にしていることの一つ。「パソコンを使えば、コマ送りの画像をきれいに手早くつくれます。でも、中学生には手描きのほうが取り組みやすいし、色や動きがふぞろいなところが温かみを感じさせてくれます」。

ある部員は言う。「難しいのは色塗り。コマによって色むらが出ないよう、みんなで塗り方をそろえます」。コマをつないでいくには、グループでの協力が欠かせないのだ。

「一人きりでは絶対にできない活動です。人と関わることに消極的だった生徒も徐々に、人を助け、人に頼ることを学んでいきます」と、石原先生。完成作品は、全校集会でも上映される。見てもらえるという喜びも、部員たちを支えているようだ。

「平和のアニメーションを、世界に広めたい」。これからの広島を担う生徒たちのまなざしは力強い。



上／これまでに制作したアニメーション4作品の原画の一部が縦に並べられている。
左／過去、クレイアニメーションの制作に取り組んだときには、人形を数ミリずつ動かしながら撮影するという根気のいる作業が続いた。
右／グループで声をかけ合って、調整しながら原画に色を塗っていく。

※1 広島国際アニメーションフェスティバル
1985年より広島市で2年ごとに開催されている国際的なアニメーションの祭典。国際アニメーションフィルム協会、アカデミー賞公認。
※2 「ねがい」
広島市立大洲中学校での平和学習から生まれた曲。このときつくられたのは4番までの歌詞。その後、NPO法人「JEARN(グローバルプロジェクト推進機構)」によって、この歌詞の5番目をつくるという運動が展開され、現在も世界中から新しい歌詞が寄せられている。

教室を飛びだして

フラットホーム
FlatHOME@グンダイビジュツトクシ

特別支援学校の生徒×教育学部の大学生×アーティスト。
三者が協同して運営する「アートカフェ」についてご紹介します。



らっしゃいませ!」
——ここは、群馬大学教育学部附属特別支援学校(以下、特支)の生徒、群馬大学教育学部美術教育講座の学生、アーティスト・塩川岳氏が運営する「あそびアートカフェ」。地元の芸術祭「中之条ビエンナーレ」(※)の会場にオープンしているお店だ。

色とりどりに飾り付けされた店内には、レゴブロックや落ち葉などを使って造形的な活動ができる場が用意され、客と店員である生徒たちとの間に、楽しい会話が生まれている。

このカフェを企画した同大学教育学部教授の茂木一司先生は次のように語る。「地域のアートプロジェクトでは、障害のある子どもたちの参加がまだ少ない。そこで、特支の生徒たちと中之条ビエンナーレで何かやってみたいと思ったんです」。特支高等部の生徒たちは、普段から地元のコミュニティカフェで就労体験をしている。その活動に、教育学部の学生とアーティストをコラボレーションさせ、アートカフェを開くことにした。お店は、お茶が飲めるだけでなく、客と店員の間にコミュニケーションが生まれるよう、大学生、アーティストと一緒に工夫して、空

間を作り上げていった。
運営に関わった同大学准教授の喜多村徹雄先生はこう語る。「特支の生徒たちが楽しんで活動していたのはもちろん、大学生たちも、予想しないことが次々と起こるので(笑)コミュニケーション力がつき、たくましくなったと思います」。

このプロジェクトは「FlatHOME@グンダイビジュツトクシ」と名付けられている。「みんながふらっと立ち寄り、コミュニケーションし、フラットな関係性をつくれる、居心地のいい場」という意味が込められているそうだ。アートカフェは、まさにその名を体現する、みんなの憩いの場になっていたようだ。



アートカフェの様子。客はお茶を飲んだり、手作りのゲームを楽しんだりできる。

※中之条ビエンナーレ
群馬県吾妻郡中之条町で2年に1度開催される芸術祭。
<http://nakanojo-biennale.com>

放課後
第8回
ART



第 8 回

大家族

ルネ・マグリット

キャンヴァス, 油彩 100×81cm 1963年
宇都宮美術館蔵

©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2015 E1933

※[美術2・3上]P9に掲載

幻視する我ら大家族

ルネ・マグリットの作品に触れたのは、高校生の時。マグリットやエルンスト、ポール・デルヴォーにベルメール、マン・レイなどシュルレアリストたちの画集が立て続けに刊行され、大いに刺激を受けた。それまでは、クレー、ピカソ、ルソーなどが好きで、美術の授業でもセザンヌやゴッホなどが語られることが多かった。けれど印象派からキュビズムへという流れのなかにあった画家たちが取り上げられることはあっても、バルテュスやゾンネンシュターンを知ることはできないでいた。それらを知るきっかけは美術によってではなく、現代詩や異端文学の世界からだったかもしれない。

そうして蓋が開いた。

美術や写真、映画、文学が好きな仲間たちが集まると、宮沢賢治やルイス・キャロルなどと共に、ダリやマグリットにも熱中したのだった。音楽も興味の中心にあって、ロックやジャズ、映画音楽に歌謡曲など、それらはシュルレアリスム作品と呼

応しい、ジャンルを分けて語ることなどできずに少年たちの心と身体をくすぐっていた。

高校卒業後、地方都市から上京しシュルレアリストたちの作品に触れる機会も増え、マグリットの作品も何度も観てきた。

2015年の今年、東京の国立新美術館と京都市美術館でマグリット展が久しぶりに開催されたが、大勢の入場者のなかにて、その人気の高さをあらためて知った。

人気の高さは、童話の世界にいるような自由なイメージを観る者同士で共有でき、一方で観る人それぞれに独自の物語性を与えてくれるからなのかもしれない。

その展示数の多さにも圧倒されたが、一番印象に残ったのは「速度」だ。

マグリットの作品は、印刷されたものを見ると、一見、ダリなどと同じように緻密に描かれている印象がある。だが、実際の作品を前にして筆の運びを辿ると、意外なほど荒く

もある。それはきっと、イメージを逃すまいと決して遅くはない速度で筆を運んでいるからなのではないか？と想像する。とはいえ、情熱に任せて画布に絵の具を塗りつけるわけでは、もちろんない。

「どこに家族がいるのだろうか？」と、作品を前にした瞬間から観る者の価値観を問われるような「大家族」の、鳩と思しき鳥のモチーフは「透視」にも登場するが、その輪郭のなかには青空と白い雲があり、それを囲む海は穏やかそうで、雲の上部は暗く、けれど水平線のあたりからは、これから朝陽が差してきそうな気配もある。だからといって希望が描かれているわけではなさそうだ。

主客を転倒させる構図やモチーフはマグリットに限ったことではないが、観る者の眼差しへの問いかけが止むことはない。

作品を説明するのは野暮なことかもしれない。だがきっと、このように何事かを語りかけたくなるのがマグリットの魅力なのだろう。

佐野史郎
さの・しろう

俳優。1955年島根県松江市出身。75年に劇団「シェイクスピア・シアター」に創設メンバーとして参加。80年、唐十郎主宰の「状況劇場」に移り、84年まで在籍。86年に林海象監督の映画『夢みるように眠りたい』で主演デビュー。92年、テレビドラマ『ずっとあなたが好きだった』の冬彦役で一躍注目を浴びる。TVドラマ、映画、舞台等で幅広く活躍中。小泉八雲の朗読をライフワークとしている。